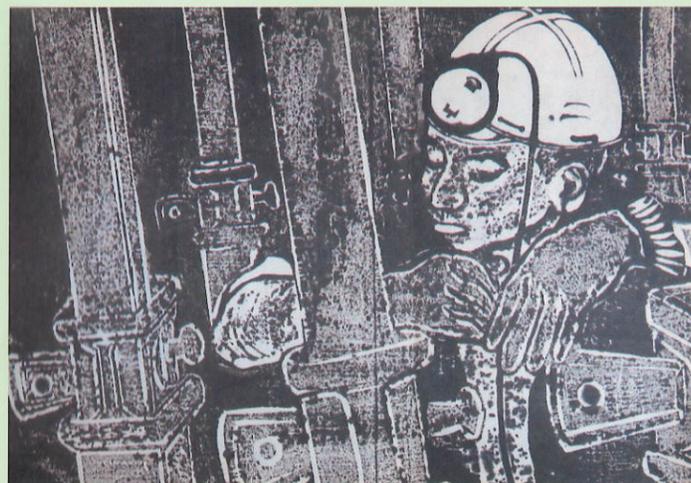


月刊たかまつ 復刻版概要

- 解題 茶園梨加(宮崎大学非常勤講師)
- 巻数 全1巻
- 体裁 B5判・上製・総360頁
- 価格 24,000円+税
- 推薦 水溜真由美(北海道大学准教授)
- 坂口博(火野葦平資料館館長)



近刊のご案内

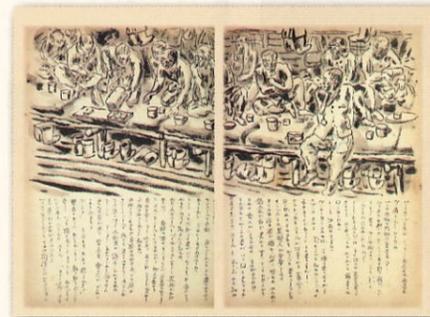
画と文 四國五郎

わが青春の記録

全2巻

徴兵・敗戦・シベリア抑留・故郷  
 広島原爆……  
 『おこりじぞう』の四國五郎は  
 1950年に、自身の半生と抑留の  
 記憶を千頁の画文集に残した!

二十歳で徴兵され、ソ満国境で敗戦を迎えた四國は、シベリアで三年以上に及ぶ抑留生活を送った。過酷な労働、ロシア人との交流、そして民主運動。命がけで持ち帰った抑留中の日記をもとにした本書は、類稀なシベリア抑留記であるとともに、原爆により故郷広島と弟を失った作者の反戦への決意の書でもあった。待望の初公刊!



- 解説 有光 健・川口隆行・四國 光
- 推薦 ジョン・W・ダワー・栗原俊雄・小沢節子
- 体裁 B5判・上製・総約1,100頁・総頁フルカラー
- 揃価額 48,000円+税

●表示はすべて税別

三人社

〒606-8316  
 京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘  
 電話 075-762-0368  
 FAX 075-762-0369

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。

月刊たかまつ

復刻版 全1巻



三人社

1950年代後半、北九州筑豊炭鉱。上野英信率いる日炭高松文学・美術サークル協議会は自由な声にあふれていた。労働・芸術・社会について語りあった成果は、ひとときを輝くサークル誌を生んだ。千田梅二、上田博らが表紙を飾った本誌は、炭鉱の外にも世界を広げ、その動きは『サークル村』に結実する運動の源流となった。戦後サークル運動研究の空白を埋めるべく、『月刊たかまつ』ついに復刻!

- 解題 茶園梨加
- 推薦 水溜真由美・坂口博
- 定価 24,000円+税
- 刊行 2017年11月



# 栄えある伝統の継承と発展

水溜真由美（北海道大学准教授）

# 『月刊たかまつ』の意義

坂口 博（火野葦平資料館館長）

谷川雁は、『サークル村』創刊宣言「さらに深く集団の意味を」に「福岡県水巻町の日炭高松炭鉱では昭和二十一年から今日まで実に十三種のちがった名前をもつ文学サークル機関誌が発行されてきた」と書いている。『月刊たかまつ』は、谷川のいう十三種の機関誌の一つであり、同じく日炭高松で発行され、近年復刊された『労働藝術』、『地下戦線』、『炭鉱長屋』の系譜に位置している。

日炭高松炭鉱は、筑豊の炭鉱労働者が多数参加した『サークル村』の中でも突出した存在だった。上野英信、千田梅二、上田博、山崎喜与志といった名だたるサークル運動家を輩出したから、というためだけではない。日炭高松のサークル運動家は、サークル誌なるものの形と理念を手探りで作り上げたからである。――表紙や扉絵を飾る、炭鉱を描いた版画やイラスト。ガリ版刷りの手作り感あふれる誌面に、労働者の肉声が響き渡る。その底流に流れるものは、炭鉱と炭鉱労働に対するかぎりない愛着、そして労働者同士の熱い連帯感情である。やがてサークル誌は、労働者を分断する企業の枠を超えて、炭鉱労働者の間に連帯の輪を広げる媒体となる。

『サークル村』前夜に発行されていた『月刊たかまつ』は、日炭高松が生んだ伝統を継承し、洗練させながら、『サークル村』へと橋渡した。『サークル村』研究と炭鉱の文化運動研究の一層の深化のため、大きな空白が埋められることを喜ぶたい。

一九五〇年代の文化運動研究は、ここ十年で飛躍的に進んだ。その契機のひとつに『サークル村』および関連雑誌の復刻版刊行があったことは、関わったひとりとして素直に喜ぶたい。ただ、そこに『月刊たかまつ』を欠いたことは、とても残念だった。全冊が揃わず収録を断念したが、この編集方針には批判も受けた。北九州・筑豊地域の炭鉱サークルを主要基盤とした『サークル村』創刊にあたって、直接に繋がる雑誌だったからだ。

こうした欠如を、ようやく補っていただけ。それも、かつての調査・復刻を継承するかたちだ。自らの世代の役割を、資料の公開・共有化をとおして、次世代へ課題を引き継ぐことと定めてきたから、ありがたいことである。

日炭高松文学・美術サークル協議会機関誌である『月刊たかまつ』の実質編集は、炭鉱を退職させられた上野英信が担った。今年には彼が亡くなって三十年が経つ。英信の仕事の全体像を掴むためにも、この復刻の意義は大きい。「日本を根底から変革する」潜勢力を、筑豊のどこに見出すのか、商業主義に抗して記録文学をどう復権させるのか。考える課題は多い。

もちろん、日炭高松や『サークル村』関係でも、埋もれてしまったサークル誌は数多い。しかしながら、遺されたピースから全貌を想像・創造するしかない。それは揃ったに違いない。問題はこれからだ。現在の文学・文化の閉塞状況を打ち破るためにも、五〇年代に学ぶことは何か。解釈の闘争は続く。

## 散文詩

### 田園交響曲

上野英信

男は、まぼろしの舟乗りの長男坊として、船戸内海の岸で生まれた。庵の子にも似あらず、ひよりのひよりの舟の船中じやと、たくまじい赤銅色の親父坊こぼした。父のこぼれ舟舟の舟舟から、男はあがてくみだす桶で、海の水が何杯あるだろうと、へさきの桶をくんで、とむの海へすてた。

友の手入れをする母の目をめすんで、虹色のれんげ田にもぐりこみ、じよんべんの出るあはれどこぼであるのだからと、れんげの花の茎を、ちんこのあはれにさしこんでみた。

はんにち知らず男は己  
戦争がつつじた。

「ジーンム・スイセイ、  
ら、それでむやのと天皇  
ワタンサンユニシ・コガ

は、むくら覚えてもふえなればかりで、海の水をかきえるのと同じように、無限につづいて混じった。戦争が太鼓くまり、男は二十一に甘った。「両種だろが気を落すぞ」と、検査の前の喫煙をのみがけら、大人たちが同席と軽蔑のまじった顔で、前以てはささめてくれた。男はただ無暗やたらと煙をあかりアッケーけるを吐いた。吐きけがら男は、さしように煙人がいじりごとが悲しく甘った。ぼろぼろ涙を甘がら、第一種合格で男は兵隊にとられた。

輪船砲台。  
男は、くる日もくる日も、タンナルの底で桶をくらし、時に日産にあがって、町火警制をした女師屋の、ついでにスフの布巾を扱った。

男は、くる日もくる日も、高射砲座のまわりをくるくる廻って、ただ無暗やたらと区画の空に、鉛色の花をうちあけた。

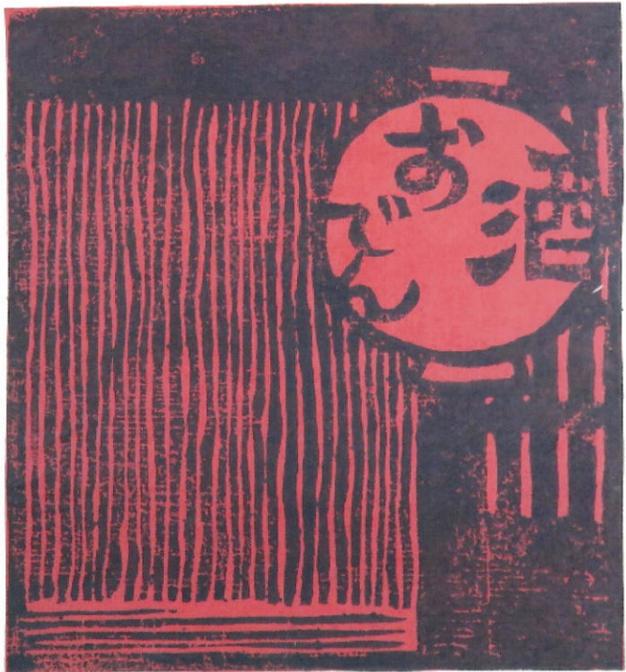
むら酒ものめけ、女郎屋にゆく気もはく甘った。

—(22)—



『月刊たかまつ』は福岡県遠賀郡水巻町頃末の日炭高松労組事務局にて発行された

## 内容見本



—(9)—

- 1955年6月 各所で石炭鉱業合理化臨時措置法案 反対闘争
- 1956年 この年、炭鉱閉山、合理化が一層進む
- 1956年11月1日 『月刊たかまつ』創刊
- 日炭高松文学・美術サークル協議会
- 1958年2月11日 日炭高松労組、全山一斉スト
- 1958年3月8日 『月刊たかまつ』終刊
- 1958年9月20日 『サークル村』創刊
- 1958年10月4日 日米安保条約改定交渉開始
- 1959年8月10日 三井鉱山、第二次企業整備案提示 (三池争議の発端)